

「賀川豊彦のお宝発見」 その3

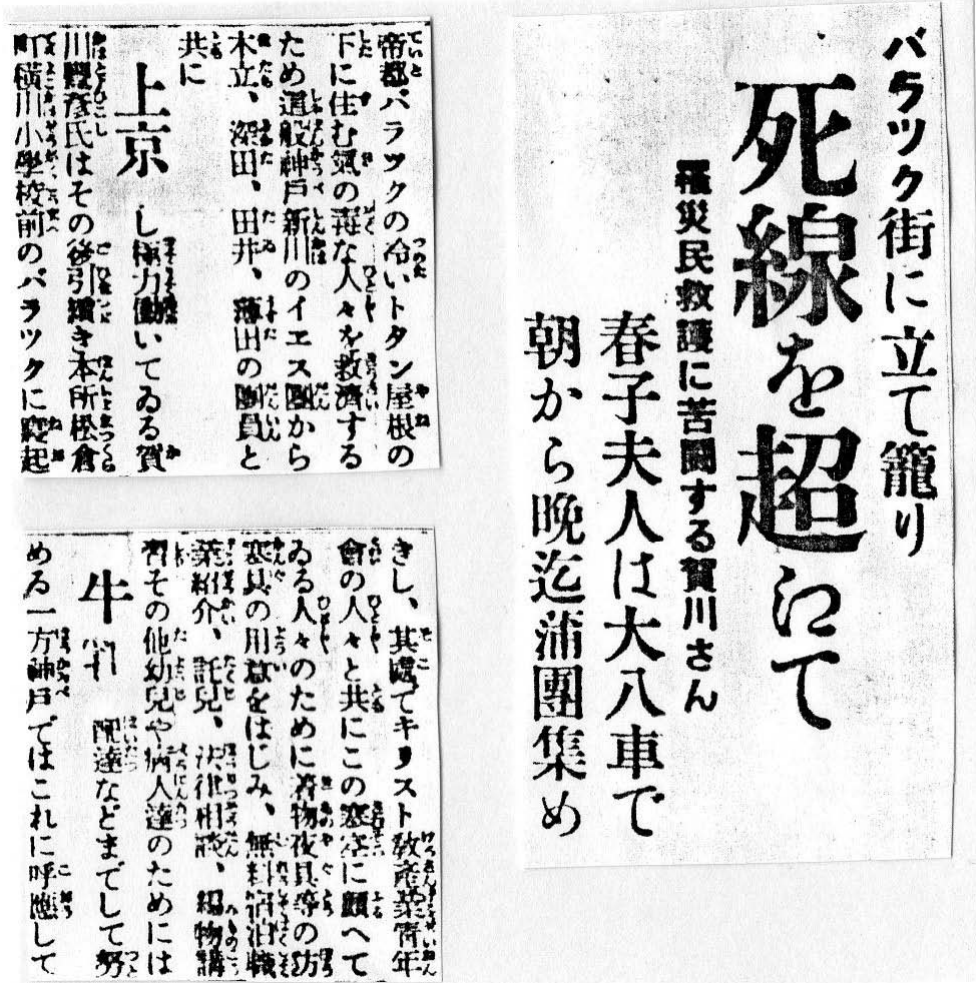
新聞記事にみる賀川豊彦 (22)

1910 (明治43) 年~1963 (昭和38) 年 (神戸版)

第22回 「東京罹災民救護」「源太郎館」

「東京罹災民救護」

1923 (大正12) 年11月21日「神戸新聞」



存子夫人が覺醒婦人會の酒田きよ子竹内ゆきあ本川うた子その他イ

エス製の夫人達と共にこれ等東京罹災民に送る諸團その他を一生懸命車で集め廻つてゐるが當の實川氏は語る「現在本所の自分達のパラツクには十四家族の氣の毒な人人を收容してゐますが

### 目下

は一燈園の人達とも

協力して市が浸草に造る無料宿泊所の仕事を手傳つてゐます  
この寒さに向つてバラツクの中で辛うじて寒さを防いでゐる何十萬といふ氣の毒な人達のため出来るだけの奮闘を要します、目下の處は防寒と健康とが最も必要なので自分達は出来るだけの關西方面から着物や夜具を集めてそれを配ることに努め健康

のためには神戸から馬島トクトルが上京して働いて呉れ法律の相談は三原法學士が引受けて呉れてゐます  
その他一品や早稻田の

### 學生

の人や多くの青年等

が弊れも心から氣の毒な人々に同情して、働いて呉れるのを何よりも嬉しく思ひます殊に最近或婦人の如きは自分の全財産を擧げて罹災者のために投げ出し自分の處へ来て働いて呉れてゐます今後は現在の仕事を一層押し廣めてゆく心算で來年三月頃まで東京にゐる心算です春になればいくらか罹災の人達もよくなるかと思ふ

### 人達

もよくなるかと思ふ

のでそれから關西と東京と隔月に働きたいと思つてゐます」氏はこの忙しい救濟事業のかたはら毎日一箇所二箇所づゝ回遊をして廻つてゐる

バラック街に立て籠り

## 死線を超えて

罹災民救護に苦闘する賀川さん

春子夫人は大八車で朝から晩迄蒲団集め

- ◆ 帝都バラックの冷<sup>つめた</sup>いトタン屋根の下に住む気の毒な人々を救済するため<sup>しやはん</sup>這般神戸新川のイエス団から木立、深田、田井、薄田の団員と共に
- ◆ 上京し極力働いている賀川豊彦氏はその後引続き本所松倉町横川小学校前のバラックに寝起きし、其処でキリスト教産業青年会の人々と共にこの寒空<sup>ふる</sup>に顫えている人々のために着物夜具等の防寒具の用意をはじめ、無料宿泊職業紹介、託児、法律相談、編物講習その他幼児や病人達のためには
- ◆ 牛乳配達などまでして努める一方神戸ではこれに呼応して春子夫人が覚醒婦人会の濱田きよ子竹内ゆきゑ本田うた子その他イエス団の夫人達と共にこれ等東京罹災民に送る蒲団その他を一生懸命車で集め廻っているが当の賀川氏は語る「現在本所の自分達のバラックには十四家族の気の毒な人々を収容していますが
- ◆ 目下は一燈園の人達とも協力して市が浅草に造る無料宿泊所の仕事を手伝っています  
「この寒さに向ってバラックの中で辛うじて寒さを防いでいる何十萬といふ気の毒な人達のため出来るだけの奮闘を要します、目下の処は防寒と健康とが最も必要なので自分達は出来るだけの関西方面から着物や夜具を集めてそれを配ることに努め健康のためには神戸から馬島ドクトルが上京して働いて呉れ法律の相談は三原法学士が引受けて呉れています」その他一高や早稲田の
- ◆ 学生の人や多くの青年等が孰<sup>いづ</sup>れも心から気の毒な人々に同情して、働いて呉れるのを何よりも嬉しく思ひます殊に最近或る婦人の如きは自分の全財産を挙げて罹災者のために投げ出し自分の処へ来て働いて呉れています今後は現在の仕事を一層押し広めてゆく心算で来年三月頃まで東京にいる心算です春になればいくらか罹災の
- ◆ 人達もよくなるかと思ふのでそれから関西と東京と隔月位に働きたいと思つています」氏はこの忙しい救済事業のかたはら毎日一箇所二箇所づゝ講演をして廻っている。

# 奇篤な大工が建てた

## 賀川さんの源太郎館

演説を聴いて感奮した結果

氏を敬慕して来た男

無料診療所に充らる

東大の新人木匠賀太郎博士と同一  
無手を交して東京府新松倉町で罹  
災者救護に全力を傾けてゐる  
**賀川** 隠彦さんは今度四十  
坪ほどの建物一棟を若い大工さん  
から建て買つて無料診療所を始め  
た、主任は賀川さんの親友馬島下  
クトルで若く美しい妹の久子さ  
んや兒子さんと一緒に多くの

### 患者

を世話してゐる。此

の家は大工の田中源太郎(三)君が  
たいて建てたと云ふので氏は「源  
太郎館」と命名してゐる、そのい  
はれを聞くに何んでも賀川さんが  
京都で二回ほど演説したのを、聞  
いた田中君は非常に感奮した、そ  
して間もなく

### 此度

の震災で大規模の大

工であつた君は同僚二百五十人と  
共に選ばれて東京に來り勤めてゐ  
たが一日上野の山から一面の焼け  
野を見て「東京は今金儲けをする  
所ではない」と思ひ急いで山を下  
り賀川さんの樹中に飛び込んで來  
たのださうだ、そして働いて得た  
金を

### 全部

賀川さんの前につと

うぞ御用の足しにでも」と提供  
して毎日「嬉しいいく」といつては  
木を削り数日ならずして診療所を  
建てしまつたのだと

## 奇篤な大工が建てた賀川さんの源太郎館

演説を聴いて感奮した結果

氏を敬慕して来た男

無料診療所に充らる

- ◆ 東大の新人末廣巖太郎博士と固い握手を交して東京本所松倉町で罹災者救護に全力を傾けている
- ◆ 賀川豊彦さんは今度四十坪ほどの建物一棟を若い大工さんから建て貰って無料診療所を始めた、主任は賀川さんの親友馬島ドクトルで若く美しい妹の久子さんや晃子さんと一緒に多くの
- ◆ 患者を世話している。此の家は大工の田中源太郎（二五）君がたゞで建てたと云ふので氏は「源太郎館」と命名している、そのいはれを聞くに何でも賀川さんが京都で二回ほど演説したのを、聞いた田中君は非常に感奮した、そして間もなく
- ◆ 此度の震災で大橋組の大工であった君は同僚二百五十人と共に選ばれて東京に来たり働いていたが一日上野の山から一面の焼け野を見て「東京は今金儲けをする所ではない」と思ひ急いで山を下り賀川さんの懐<sup>ふところ</sup>中に飛び込んで来たのださうだ、そして働いて得た金を
- ◆ 全部賀川さんの前に「どうぞ御用の足しにでも！」と提供して毎日「嬉しい嬉しい」といっては木を削り数日ならずして診療所を建てしまったのだと。

<参考>

関東大震災救援活動の本拠となった本所のテントの中で（賀川記念館「賀川豊彦写真集  
データ・ディスク」より）。

（2011年3月31日記す。鳥飼慶陽）

